



農業大学校創立90周年を迎えて

鳥取県知事 平 井 伸 治

本校の礎は、昭和4年、将来のリーダーとして指導的役割を担う農業後継者の育成を目的とし、地元有志の手により、財団法人山陰国民高等学校として、関金の地に開かれました。その後、全施設が鳥取県に寄付され、昭和9年に県立修練農場として再出発し、以来開拓増産修練農場、経営伝習農場、農業経営大学校、農業大学校と発展の歴史を重ね、多くの皆様の御協力を賜り、この度90周年の輝かしい節目を迎えることができました。同窓生の皆様、関係者各位からこれまで賜りました数々のご支援に対し、衷心より感謝申し上げます。

全国で3番目、西日本で最初の国民高等学校に始まる長い歴史と伝統をもつ本校は、いつの時代にあっても鳥取県農業の発展・振興に寄与すべく、人材育成に努めて参りました。平成9年には、施設の全面改修と併せて「国際農業交流館」を新設し、農業分野における環日本海交流の一躍を担う農業研修施設としての活動を本格化させ、鳥取県と友好交流関係を結んでいるモンゴル中央県などからの研修生を数多く受け入れ、本校で学んだ野菜生産技術等が海外でも普及するなど、国際貢献の拠点ともなってきました。

農業の担い手を拡大するとともに移住定住にも役立てるため、平成20年から高校卒業者に加えて養成課程に社会人特別枠を設け、研修課程に短期研修科を開設することとしました。これにより、社会での経験を持つ就農希望者が本県農業に進む道が大きく開かれていきました。更に、平成27年に全国に先駆けて開設したアグリチャレンジ科は、公共職業訓練として、トラクター等の農業機械操作等を習得し職業としての農業にはばたいていく人材を育成するもので、鳥取県ならではの農業研修のあり方を確立してきました。

昨今、本県の農業は、大きく転換しつつあります。これまで右肩下がりだった農業産出額が増加に転じはじめた。この機運をとらえて「農業生産1千億円達成プラン」を策定し、それぞれの産地で将来を見据えた担い手を育て、生産拡大に果敢にチャレンジし、農家個々の所得向上を図る挑戦に打って出ることになりました。さらに、農業を取り巻く情勢が激変し農産物市場の国際化が進む中、グローバルGAPやスマート農業の推進を図るべく、農業大学校も貢献していかなければなりません。

単に耕作技術を学ぶだけではなく、国際感覚や経営能力をも備えた「たくましい農業者」の育成に向けて、本校の歴史と伝統を基礎として、90周年の節目を新たな出発点として、果敢にチャレンジしてまいります。

結びにあたり、本県農業の限りないご発展と、皆様方のご多幸をご祈念申し上げます。



90周年を迎えて

90周年記念事業実行委員会長 横川 力
鳥取県立農業大学校修農会長

鳥取県立農業大学校の90周年を迎え、お祝いを申し上げます。

本校は、昭和4年2月22日、財団法人山陰国民高等学校として開校されました。当初は旧赤碕町の農林水産省種場所跡地を候補地としていましたが、入手が難しく、陸軍演習跡地であった関金町のこの地で、先生と生徒が起臥寝食・農作業を共にしました。

昭和9年、国は中堅農業者の育成を目的として各府県に県立修練農場を設置することとし、山陰国民高等学校は全施設を無償で県に寄付し、県立修練農場として発足して16期、その後県立経営伝習農場17期、県立農業経営大学校16期、県立農業大学校34期と変遷を経て、90周年を迎えました。

私は、農業大学校の3期生として卒業し、果樹と水稻の複合経営を行っています。

当時を振り返ってみますと、入学式の田中道宣校長の式辞の中で「授業は7割、実習3割」とありましたが、実際は逆であり、いろいろと苦労したと感じます。しかし、この経験が農業をしていく上で役に立っています。それは、仕事をしている時、学生の頃いろいろ教えていただいた事が頭の中によみがえってきて、行き詰まった時に励みになっています。

私は、東郷果樹研究同志会の会員で、毎年試験研究をまとめて発表していますが、学生の頃に教えていただいたことが今でも役に立っているのです。

我が家の農業経営の柱となっているのは梨生産であります。梨づくりの締めくくりとなる収穫の際には、当時教えられた「喜び」と「反省」という言葉を思い出します。1年間汗水流して作ってきた果実を収穫する喜びと、中には小玉や病気などになってしまった果実に対する反省で、翌年の栽培につなげていきたいと思えます。

農業大学校では現在、先進農家実践研修、スキルアップ研修（長期12ヶ月、短期4ヶ月）、アグリチャレンジ科（公共職業訓練）など、新たに農業を目指す社会人向けの研修も行っており、養成課程以外でも即就農に繋がる体制が整っています。就農を考えている方には希望が持てる教育施設だと思います。

最後になりますが、この90周年記念事業の実施・記念誌の発刊にあたり、同窓生並びに農業大学校の旧・現職員の皆様には、多額の御寄付を頂戴し、誠にありがとうございます。

鳥取県立農業大学校の益々の発展と同窓会の皆様の御活躍と御健勝を祈念しまして、発刊の言葉といたします。



創立90周年にあたって

鳥取県立農業大学校長 小林 智子

地域農業の担い手や農業農村の指導者を育成するために、本校の前身である山陰国民高等学校が昭和4年2月22日に全国で3番目の国民高校として開校されました。その後、修練農場、経営伝習農場、農業経営大学校を経て、昭和59年に現在の農業大学校が発足してから35年となるとともに、創立90周年を迎えました。開校当初からの「農場実習を基本とし、実践的な農業技術、経営能力を習得する」教育理念は変わることなく引き継がれており、農場のあちこちに実習に励む学生、研修生の姿を毎日目にするすることができます。

一方社会情勢は、少子高齢化による日本の人口減少が急速に進んでおり、農業、農村では耕作放棄地増加や地域農業の担い手不足が深刻となっています。このような中で農業の持続的発展に向け、担い手への農地集積・集約化や農業の法人化による経営の安定効率化が進んでいます。また、グローバル化する農産物流通や多様化する消費者ニーズに対応するために、GAP認証などによる食の安全性確保、6次産業化による新たな価値の創出などが求められています。

本校では、未来の農業を担う人材育成に向け、時代の変化に即応したカリキュラム改正、グローバルGAP認証取得、先進農家等に学ぶ授業導入、食の6次産業化プロデューサー育成講座開設などを行ってきました。

新規就農を目指す社会人を対象とした研修課程では、関係機関、生産組織等と一体となって現場ニーズに即した幅広い研修を企画実施し成果をあげています。公共職業訓練「アグリチャレンジ科」、就農予定地に関係機関、生産組織などによる就農サポート体制づくりをしたうえで研修を開始する「先進農家研修」、県主要品目の基礎技術を学ぶ「スキルアップ研修」などです。

国際交流では、平成10年から継続してモンゴル研修員21名の研修を受け入れています。この取組が施設導入などによる野菜生産拡大に貢献したと評価され、平成29年4月にモンゴル中央県から本校へ名誉勲章が授与されました。そして、多数のモンゴル研修員が12月1日の創立90周年記念事業式典に自らお祝いに来てくださることとなり、大変感激しています。今後とも末永く農業交流の強い絆が結ばれることを心から願っています。

これまでの卒業生は延べ2,655名となり、その多くが本県の地域農業をけん引され、いつの時代も生産組織や地域リーダーとして活躍されています。この節目に、修農会の皆様のご尽力により本校の歴史を刻む記念誌を発刊されますことは、次代に向けてエールを送る大変意義深いことと感謝いたします。

新規就農者育成、次代に即した農業人材育成、食農教育など農業の根幹となる人づくりに果たす農業大学校の役割の大きさを再度認識し、栄えある歴史を重ねられますように一層の精進をして参りたいと思います。

終わりにになりましたが、同窓生、旧職員並びに関係各位の多大なご後援に感謝申し上げます、今後益々のお力添えを賜りますようお願い申し上げます。